



聴診器がつめたい

新潟市「やぎもと小児科」医師 柳本 利夫

つめたいつめたい

小児科の診察には聴診がつきものです。「もしもしをします」と言って子どもに聴診器をあてます。すると子どもを抱いている母親が「つめたいつめたい」と言います。子どももそれに応じて「ちゅめたいちゅめたい」と言います。実は私の聴診器は人肌に加温してあります。あったかだよ…と思うのですが母親が楽しそうなのでそのままにします。保育園の年中さんくらいになると「あったかいよー」と親に訂正できるようになります。それはともかく、親と子が同じ体験をして、それに名前（言葉）をつけることで、子どもの認識の世界が作られていきます。聴診器の接触を「ちゅめたい」と名づけることで、ひとつ子どもの世界がひろがります。それが客観的にみて正しいかどうかはさほどの問題ではありません。

医師の直感、親のかん

経験したことに名前をつけて記憶しておく事は、小児科医にとっても重要です。特殊な病気でも何度か経験すると、病歴や訴え、様子から病名がピンとくるようになります。診断まで至らなくても、表情などから重症度の判断ができるようになります。臨床医の直感というやつです。同様に、親が「子どもの様子がいつもとちがう」という違和感を訴えることがあります。親だからこそわかる、言葉でいいあらわせない違和感、いわゆる親のかんを小児科医は大切にします。これらも皆、経験から学ぶことで認識の世界が広がった結果です。

ひとりひとり違う

子どもが育つ過程で経験する出来事は、ひとりひとり違います。突然犬に吠えられた子どもは犬がこわくなり、犬を避けて通るかもしれません。生まれたときから犬と一緒に子どもは犬が可愛くて犬がいると寄っていきます。一事が万事で、そのような様々な経験が積み重なり、その人らしさが出てきます。多様性が出てくるのです。ある出来事で感情的になって怒る人もいれば、不安になって落ち込む人もいます。あせる人もいれば、心配なほどのんびりしている人もいます。それはその出来事をどのように認識して対処しているかによって違いが出てくるのです。

猿沢の池

奈良の興福寺、五重の塔のそばに猿沢の池があります。この池が読み込まれた短歌があります。「手を打てばはいと答える 鳥逃げる 鯉は集まる 猿沢の池」手を打つ音を聞いて、女中さんははいと返事をし、鳥は危険

を感じて飛び立ちます、鯉は餌の時間だと思って寄ってきます。同じ音を聞いても、立場や経験からそれをどう認識し、どう行動するかはさまざまです。興福寺は仏教の中でも法相宗という教えを伝えており、法相宗は唯識論という考えに基づいています。これは、世界は自分の認識が作り出したものであり、みんな同じ世界に住んで同じものを見ていると思っているが、ひとりひとり別々の世界があるという考えです。

とす組さん

保育園児の孫に「何組さん？」と尋ねると「トス組さん」と言います。本当は「コスモス組」なのですが、彼にとってはトス組さんなのです。トス組という言葉でリアリティーを持った自分のクラスを思い浮かべていると思います。仮面ライダーの戦いごっこでは私が悪人になりますが「悪い人はそんな動きはしない」と動作を訂正されます。正しい「悪い人の動き方」に対する彼なりの認識があるのです。彼は毎日毎日さまざまな体験をして、言葉を覚え、自分の世界を作り続けています。やがて成長し、できあがる彼の世界が、自己に対する肯定感を持つことができるよう、人に対する信頼感を持つことができるよう、祖父として願うばかりです。いや、願うばかりではなく、そのような認識を手助けする体験を孫と共有できる祖父でありたいと考えています。



コウノトリ

昨年の秋から佐潟にコウノトリが飛来しています。足環と発信機がついており、千葉県野田市で放鳥されたオスです。佐潟が気に入ったのかのんびりと餌をとったりしています。コウノトリはトキと同じく絶滅が心配され、繁殖と放鳥の取り組みがなされています。